

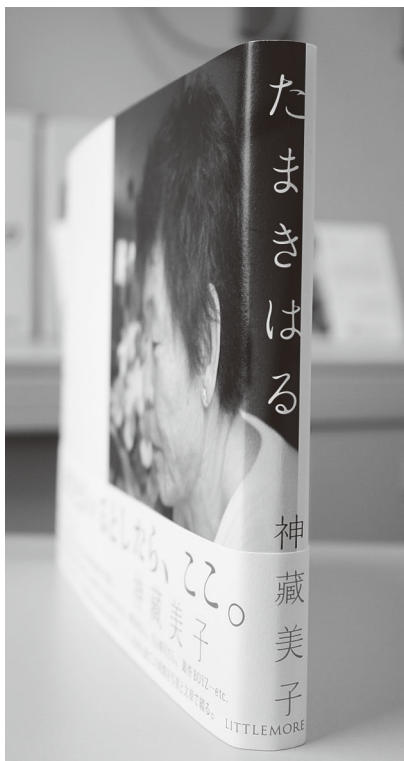
写真集

『たまきはる』

神藏美子＝著、末井昭＝本文レイアウト
2015年2月刊行 リトルモア

写されたものたち
ひとりひとりに、
細く小さな、
でも確かに似ている点を見る。

(書評者)
齋藤陽道 写真家



「たまきはる」とは、「魂極まる」——“命”にか
かわる枕詞だ。

本書は、自らの三角関係を赤裸々に写し取った前
作『たまもの』から12年の歳月を経て生まれ
た、神藏美子氏の究極の「私小説／私写真」であ
る。

父の死、長い鬱のトンネル、夫・末井昭とのぎく
しゃくした生活、そして寺山修司、障害者プロレ
スのがっちゃん、銀杏BOYZ、などさまざまな
人たちとの出会いと別れ。これらの出来事が、聖
書と交錯しながら息詰まる展開を見せる。

この話題の写真集を、本誌表紙撮影でもお馴染み
の齋藤陽道さんに読んでいただいた。

ひとつぶの、今にもしたたり落ちそうな雫^{しずく}と、
「神様はいるの？」という問いかけから始まる。
お父さんの死を軸にして、さまざまな人が通り過
ぎていく。

そして最後のあたりで、カラーで写されたお母
さんとスエイさんの顔が並んでいる。ふたりとも
顔の輪郭がほどけるほどに、笑っていた。その笑
顔はとても似ている。そのことに、言葉ではきつ
と書き尽くせない、希望を見る。

スエイさんとお母さんと、写真を写した神藏さ
ん。そうしてまた、写真集を一から読み直して、
写されたものたちひとりひとりに、細く小さな、
でも確かに似ている点を見る。

人にしてもらいたいと思うことを、人にもしな
さい。(ルカ 六章三十一節 新共同訳)

——本書 p202 より

家族は成っていくものだとか教わる。血のつなが
りだとかで最初から定められたものが家族なんか
ではなく、してもらいたいことと、しなければなら
ないことの小さな約束を積み重ねることで、い

つのまにか、そうになっていくものなのだった。日記に書いておかなくては忘れてしまうような、小さな約束を交わしながら、家族となる切符を受け取り、そのひとに向かうささやかな旅を重ねているのだ。それが日常だった。

その旅はささやかすぎるために時々、切符を受け取っても向かうことを面倒くさがったりして、そうしたことが積み重なって起こるすれちがいや諍い、とまどい。それをこの『たまきはる』は隠さない。

お母さんとスエイさんふたりの笑顔の次のページは、テーブルで雑多な小物といっしょに置かれた二枚のポートレート。女装してバナナをくわえるエロチックなスエイさん、ニコリ笑ってただそこにいるという感じの千石剛賢さん。

その次のページはベレー帽をかぶった若いお父さんのポートレート。そばに赤紫の花が二輪。こ

の写真に隣り合って置かれた、本を締めくくる最後の言葉は「パパ、愛してる」。

荒木経惟さんが、亡くなった妻、陽子さんの遺影をかかえたセルフポートレートの写真について言った言葉を胸にころがしながら、僕はこの流れを見ていた。

「写真家だからと言って陽子の遺影をもった。このポートレイトを生涯私は超えることはできないであろう」

さいとうはるみち◎石神井ろう学校卒業。障害者プロレス団体「ドッグレッグス」に「陽ノ道」として所属。好きなものはバスター・キートンと水とブラックコーヒーとなめたけと酒と霞。写真集に『感動』（赤々舎、2011年）、『宝箱』（ぴあ社、2012年）。現在「週間金曜日」で「それでもそれでもそれでも」を連載中。今年から本誌表紙写真を提供。



精